

シニアになるといろいろな役割が回ってきて研究どころではなくなる。私は10年前から大学の役職に就き、最近の6年間は大学でCIOを務めていた。この間、文部科学省科学官、電子情報通信学会ISS会長なども務めた。研究に集中できなかつたが、いろいろなことを経験させてもらった。

大学などの組織で情報技術を使って改革を進めようとしたときに、執行部の方々と議論をするのであるが、話がかみ合わないことが多かつた。後になって分かってきたことであるが、これは情報の専門家と情報が専門外の教員・職員の情報に関する知識の違い、感覚の違いが主な原因であった。人間は当然自分流のモノの見方で発想し考える。このとき、情報の知識や感覚がないと発想の中に情報の要素は入らない。この結果、出てくるアイデアは情報の専門家から見れば時代遅れのように感じられる。多くの時間をかけて議論をして一部情動的な施策を入れてもらっても、実行段階で企画する人たちも情報の本質を理解していないので、分からないところはやらない。これでは、情報技術を活用した組織改革、社会改革は進まない。

考えてみれば、私が学生であったころに情報工学科ができた。したがって、ほかの学部や学科にいた私の同級生は情報のことなど勉強もしなかつた。今、この世代の方々が組織の執行部に入って重要な役割を果たしている。情報技術は社会の基本的な活動を支えるコミュニケーションを変えるので、それに伴って、社会が急速に変化する。表面的には、さまざまな情報をスマホで検索して利用するという話だけであるが、その根本には情報共有の原則と計算論的な考え方が潜んでいる。このあたりを理解していないと、組織での企画や社会の未来像が描けない。この現状は過渡的な現象であろうか？ PCが普及したころに小学校時代を過ごした人々は十分な情報の知識を持っているだろうか？

美濃導彦 Michihiko MINOH

京都大学学術情報メディアセンター

【正会員】 minoh@media.kyoto-u.ac.jp

京都大学学術情報メディアセンター教授。京都大学大学院博士課程修了。工学博士。画像処理、人工知能、知的コミュニケーション関係の研究に従事。IEEE、ACM、電子情報通信学会各会員。

日本の初等中等教育では「情報」を教えることにはなっているが、受験科目でもないので熱心に教えられていない。また、大学の情報教育はリテラシー教育であり、情報の基礎知識や原理はあまり教えていない。情報は社会のインフラになり、大きく社会を変えているという事実があるにもかかわらず、一般的には情報は技術であり学問として認められていないと思われる。

このような状況では、異分野の人に、ある分野の考え方や最新の研究の内容を分かりやすく伝えるサイエンスコミュニケーションが重要になる。この言葉が社会的に知られるようになったのは、遺伝子研究などの生



[シニアコラム]

好き放題



[No.81]

情報系のサイエンス コミュニケーション

命科学研究が倫理的問題を起こす可能性が出てきたのがきっかけである。情報の研究や情報技術は社会に浸透し大きな影響を与えていくことを考えると、情報系の多様なサイエンスコミュニケーションが重要となる。

情報技術は広く利用されているが、多くの人はその仕組みを知らないで使っているだけである。セキュリティや犯罪などに情報技術が使われるとテレビが取り上げてその仕組みを説明するのが現在のサイエンスコミュニケーションである。情報技術を利用してイノベーションを起こし社会を改革していくためには、あらゆる人々が情報の考え方を理解している必要があり、このためには情報を学問にして教育を充実させていかなければならない。また、今後の情報関係の研究のためには、社会の受容性がますます重要になる。研究者の社会的貢献として研究者一人ひとりが機会のあるごとにサイエンスコミュニケータの役割を果たし、情報の考え方や原理を社会に広めていくことが重要であろう。同時に、情報の専門家が高等教育だけでなく初等中等教育でも情報科目を分かりやすく教えていくという地道な努力も求められている。

(2017年7月13日受付)